レッシングのキリスト教――伝記的考察――

安酸敏眞

はじめに

レッシングとキリスト教の関わりは、わが国の知識人にとって長い間いわば盲斑に属する事柄であったといっても過言ではない。仄聞するところによると、拙著『レッシングとドイツ啓蒙』（創文社、一九九八年）についての書評を日本基督教学会の学会誌『日本の神学』に掲載することに関して、当時の編集委員の一人の重鎮Y氏が反対されたという。レッシングなぞを含めると、ヘーゲルでも誰でもおよそ西欧の知識人の大半が対象とならざるをえないというのが、氏の反対理由であったらしい。一見もっともらしく思えるが、しかしこの事例はわが国の知識人に巣食うある問題性を逆照射している。

わが国にレッシングをはじめて紹介したのは、石橋忍月（一八六五―一九二六）であったが、影響力が強かったのは森鷗外（一八六二―一九二二）の「レッシングが事を記す」[1]という一文である。彼のレッシング論は、ダンツェルとツィメルンのレッシング伝[2]に一面的に依拠しており、今日からすれば少なからぬ誤りを含んでいるが、専門のゲル

マニストではなかった彼が、レッシングについてこれだけの知識をもっていたことは評価されてよい。しかしながら、鷗外の「レッシングが事を記す」は、批評家ならびに劇作家としてのレッシングの叙述に力点が置かれており、キリスト教思想家としての彼については、むしろ意図的にそぎ落とされている。レッシングの全体像を理解するためには、彼のキリスト教理解は避けて通れないが、わが国の独文学者たちは鷗外の顰みに倣い、一世紀以上にわたってキリスト教理解を欠いたままレッシングを読みかつ論じてきた（同様のことは、例えばライプニッツやヘーゲルについても言える）。つまり、キリスト教問題をあえて脇に置き、それを問わない仕方でヨーロッパの哲学や思想や文学を論ずるというのが、明治以来のわが国のやり方だったのであり、Y氏の発言もこのような伝統を素朴かつ無批判的に反映したものである。

ところで、鷗外の「レッシングが事を記す」からちょうど百年後の一九九一年に、南大路振一という関西を代表する独文学者でレッシング研究の大御所が、レッシングの生地カーメンツに招待され、そこでわが国におけるレッシング受容史を概観するかたちの、「日本におけるレッシング」（Lessing in Japan）という題の講演を行っている。これはなかなか示唆に富む講演であるが、筆者にとって最も興味深いのは、百年の受容史の結論として語られる以下のような発言である。

しかし、日本のレッシング研究は、彼の神学的著作に関しては、相変わらず大きな困難を覚えています。理性と啓示（H・ティーリケ、一九三六年）――この問題群は、われわれ非キリスト教徒にとって、消化するのがただただ困難な食事を意味しています。ナータンの指環の譬喩にはわれわれはたしかに親しんでいます。しかし考え得る最も辛い体験（これはわれわれに旧約聖書のヨブの試練を思い起こさせる）をした後で、それにもかかわら

ず、このドラマの主人公に神の公正さを肯定させるのは、一体いかなる理性だったのだろうか（第四幕第七場）、とわれわれがひとたび自問するとき、このVernunftを通常の日本語の《理性》という語で言い表しても、大した偉業をなし遂げたことにはならないということが、われわれに明らかとなります。われわれはここにおいて『レッシング時代の神学』（K・アーナー、一九二九年）をより深く研究しなければなりません。……」[3]。

筆者が南大路氏のこの講演について知ったのは、拙著『レッシングとドイツ啓蒙』ならびに *Lessing's Philosophy of Religion and the German Enlightenment* (Oxford University Press, 2002) を上梓したあとのことであるが、実は筆者のレッシング論は、期せずして南大路氏が指摘された問題に一つの答えを与えるかたちになっている。したがって、ここではそれについて再述することはしないで、むしろレッシングとキリスト教との関わりを、その後の伝記的研究の成果を踏まえてもう一度素描してみたい。

一

ゴットホルト・エフライム・レッシング（Gotthold Ephraim Lessing, 1729-81）は、一七二九年一月二十二日、ザクセン王国の小邑カーメンツに産声を上げた。カーメンツはドレスデンの東北東約四十キロ、電車で五十分少々行ったところに位置しており、現在ではそこにカーメンツ・レッシング博物館（Lessing-Museum Kamenz）がある。残念ながら、生家は一八四二年の火災で焼失してしまい、現在そこには記念碑が設置されているにすぎない。彼の父ヨーハン・ゴットフリート・レッシング（一六九三―一七七〇）は、ヴィッテンベルク大学で神学と哲学を修めた学識あ

る正統派の牧師であり、彼の母ユスティーナ・ザーロメ（一七〇三―一七七七）も由緒ある牧師の家系の娘であった。父親は息子の才能を見抜き、幼い時から彼に厳格なキリスト教教育を施したので、四、五歳のときにはすでにルター派の信条をそらんじるほどになったという。[4]

一七四一年、レッシングはドレスデンの西北西約二十五キロに位置するマイセンのザクセン侯立聖アフラ校に入学した。アルブレヒト城に続く小高い丘の上にある学校の正面入り口の壁には、記念プレートが設置されており、そこには白地に青い字で「一七四一年から一七四六年までゴットホルト・エフライム・レッシングが、この土地にあった侯立聖アフラ校に通学した」旨が記してある。レッシングはザクセン随一のこの名門ギムナジウムにおいて、「頭脳の鋭敏さと抜群の記憶力によって異彩を放って」[5]いた。ときの校長グラーベナーはレッシングを「二倍の秣が要る馬」(ein Pferd, das doppeltes Futter haben muß)[6]に譬えているが、少年レッシングは教師たちが驚嘆するほどの理解力と熱心さで、あらゆる教科を短期間に修得してしまい、一七四六年六月三十日、通常の年限よりも早くこの学校を卒業した。そして同年九月二十日、カーメンツの奨学金を支給されてライプツィヒ大学に入学した。彼が成人した時代は、ディルタイの言葉を借りるなら、「ドイツの文化全体が神学的だった時代」[7]であった。彼は両親の希望を入れて神学を専攻したものの、聖アフラ校時代にすでに文学に目覚め、処女作『若い学者』*Der junge Gelehrte*（一七四五）の草稿をしたためていた彼にとって、神学部の授業はむしろ退屈なものであった。当時この大学には文献学者および神学者として名高いエルネスティ（Johann August Ernesti, 1707-81）がいたが、若き神学徒の心をとらえたのは、かび臭い机上の学問であるよりはむしろ実人生の人間模様とそれを舞台の上で演じる演劇の世界であった。レッシング自身の言葉を引けば、

……わたしは年若くして学校を出ましたが、自分の全幸福は書物のなかにあると確信していました。わたしはライプツィヒにやって来ましたが、それは全世界を小規模ながら見ることのできるところでした。わたしは最初の数カ月間、マイセンではやったことがないような引きこもった生活をしました。つねに書物に向かって、ただ自分自身のことだけに没頭し、おそらく神様のことを別にすれば、他人のことなど滅多に考えませんでした。……けれどもこの状態は長くは続きませんでした。わたしの目が開けたのでした。運良くと言うべきでしょうか、それとも運悪くと言うべきでしょうか。それは将来が決めることです。わたしは悟ったのです。たしかに書物はわたしを博学にするが、しかしけっしてひとかどの人間にはしないだろう(die Bücher würden mich wohl gelehrt, aber nimmermehr zu einen Menschen machen)と。わたしは思い切って自分の部屋から出て、同輩たちと交わってみました。これはまあ、わたしと他の人たちとの間には何という違いがあることだろう、と気づきました。田舎者のおずおずさ、野暮で貧相な体つき、全くの礼儀知らずで社交知らず、誰でも自分が軽蔑されていることを読みとりたくなるような嫌な顔つき、こうした点は自分自身の判断では、依然としてわたしに残っていた長所だったのですが。わたしはそれまで一度も感じたことがないような恥ずかしさを感じました。そしてその結果はといえば、わたしはどんな犠牲を払ってでも、これらの点で自分を改善することを決意したのでした。わたしが何に着手したかは母上ご自身がご存じの通りです。わたしはダンスとフェンシングと乗馬を習いました。……こうした鍛錬におけるわたしの進歩は著しく、以前は君にはこの面の才能がまるっきりないと言い張っていた人たちでさえ、かなり驚いたほどでした。出だしが良かったので、すっかり元気づきました。多少体つきが良くなったので、いまや実人生を学ぶためにも、仲間を求めました。わたしは、遥かに楽しめておそらく実益もかねる本

を見て回るために、真面目な本をいっときわきに置きました。先ず手にしたのが喜劇でした。信じられないとお思いになるかもしれませんが、喜劇はわたしにきわめて役に立ちました。わたしはそこから行儀が良くてもわざとらしい立ち振舞と、不作法でも自然な立ち振舞とを区別することを学びました。わたしはそこから真実の美徳と偽りの美徳を知り、そして悪徳はばかばかしいと同時に有害であるために姿を消してしまうことを知りました（一七四九年一月二十日付けの母ユスティーナ宛の手紙[8]）。

こうしてレッシングは、当地で一人前のジャーナリストとして活躍していた七歳年長の従兄のクリストロープ・ミューリウス（Christlob Mylius, 1722-54）を介して、やがて演劇の世界へと足を踏み入れていき、ついには両親が定めた神学の道から逸脱してしまうことになる。親しくしていたノイベリン劇団の借金の保証人になったことが裏目に出て、執拗な借金の取り立てに遭い、もともとの神学の勉強だけでなく、専攻を切り換えて学び始めた医学の勉強すら、中途で断念せざるをえなくなったからである。かくしてレッシングは、一七四八年十一月初旬、やむなく両親に無断でベルリンへ遁走した。

二

ベルリンへ赴いたレッシングは、一足先に当地に移り住んでいたミューリウスを頼って、市の中心地区のシュパンダウ通り六八番地（Spandauer Straße 68）――一九二四年には三三番地に改正――の家に転がり込んだ[9]。彼は従兄の口利きで『ベルリン特許新聞』（のちの『フォス新聞』）の記者に雇われ、主にその新聞の付録版「機知の国の最新情

報」の編集に携わった。しかし、「ドイツのモリエール」(ein deutscher Molière)[19]を夢見るわが子の姿は、敬虔な牧師館の両親にとっては、聖書の「放蕩息子」の姿を連想させるものであり、息子の魂の救いを危惧したルター派正統主義の牧師の父は、キリスト教信仰からの逸脱をなじる厳しい手紙を書き送った。駆け出しの「自由著作家」としてのレッシングは、一七四九年五月三十日付の父ヨーハン・ゴットフリート宛の手紙においてこれに答え、「真理探求者」としての面目躍如たる自己弁明を試みる。

キリスト教教理の原則を覚えこみ、しばしばそれを理解もせずに唱え、教会に通い、あらゆるしきたりを、ただそれが慣行になっているからとの理由でともにする人間がよりよきキリスト教徒であるのか、あるいは、ひとたび賢明に疑い、探求の道を辿って初めて確信に達した人間、ないしは達しようと少なくとも努力している人間がよりよきキリスト教徒であるのか、それは時が来ればわかることです。キリスト教は両親からそっくり鵜呑みにして受け取られるべきものではありません。なるほど大抵の人間は、財産を相続するのと同じようにキリスト教をも両親から相続しますが、彼らはまた行状によってどのように立派なキリスト教徒であるかを証明するのです。わたしとしては、キリスト教の最も重要な戒めの一つ、『汝の敵を愛せよ』がよりよく遵守されぬ限り、キリスト教徒を自称する者たちが果たしてそうであるかを疑います。[11]

エルンスト・カッシーラーはこの言葉のなかに、「紛れもないレッシング的な信仰心」(die echte Lessingsche Gläubigkeit)[12]を看取しているが、いずれにせよ、ここには、生家の伝統(キリスト教)を「賢明に疑う」(klüglich zweifeln)ことが、若きレッシングの宗教的探求の出発点をなしていたことが、驚くべき明瞭さで示されている。

三

ところで、レッシングが最初の三年間住んだシュパンダウ通り六八番地の家には、モーゼス・メンデルスゾーン(Moses Mendelssohn, 1729-86)が結婚と同時に移り住み、死ぬまでそこに住み続けた。家主は貨幣の鋳造技術をもってプロイセン王国に仕えた宮廷ユダヤ人ファイテル・ハイネエプライムの娘レーゼル・マイアーであった。メンデルスゾーンには七人の子どもが生まれたが(長女はのちにフリードリヒ・シュレーゲルの夫人となったドロテーア、次男はのちの作曲家フェリックス・メンデルスゾーンの父親アブラハム)、彼らはすべてこの家で生まれ育った。モーゼス・メンデルスゾーンが哲学論文の執筆に、聖書の翻訳に、さらにはユダヤ人の啓蒙活動に励んだのも、あるいはキリスト教への改宗を求めるラーヴァターの訪問を受けたのも、すべてこのシュパンダウ通り六八番地の自宅においてであった。かくしてこの家はベルリンにおけるユダヤ啓蒙主義の拠点および発信基地となった場所であるが、残念なことにこの記念すべき家は一八八六年に取り壊されたため、現在それを目にすることはできない。[13]

レッシングとモーゼス・メンデルスゾーンの出会いについては、確証的な証拠は存在しないが、メンデルスゾーン研究の第一人者アレクサンダー・アルトマンによれば、レッシングにメンデルスゾーンを紹介したのはユダヤ人医師グムペルツ(Aaron Salomon Gumpertz, 1723-70)であり、二人が最初に出会ったのは一七五四年の早春のことであったという。[14] 実はこの出会いの約四年半前、すなわち一七四九年十月に、弱冠二十歳のレッシングは第五作目の喜劇として、一幕ものの喜劇『ユダヤ人』*Die Juden* (1749) を書き下ろしていた。劇のあらすじとしては、あるキリスト教徒の男爵がユダヤ人の風体をした二人組の辻強盗に襲われるが、すんでのところを従僕を従えた一人の旅人に助けら

れる。男爵はもとより周囲の者たちも、犯人がユダヤ人であると信じて疑わない。しかし男爵を救った旅人によって次第に悪事が暴かれ、真犯人は男爵家の執事クルムと領地内の村長シュティッヒであったことが明らかになる。そしてゆきずりの危険に身を投じて男爵を救出した旅人こそ、実はユダヤ人であったことが判明する。男爵はそれまで自分が抱いていたユダヤ人に対する偏見を痛く恥じる、といった内容である。

レッシングはこの作品を、一七五四年、みずからの『著作集』第三部に収録するにあたって、序文で作品成立の背景を次のように述べている。

キリスト教徒は、ある種の尊敬の念なくしては、この民族を眺めることができないはずであるが、この『ユダヤ人』という作品は、その民族が嘆息せざるをえない屈辱的抑圧を、真摯に観察してきたことの成果であった。かつてこの民族からとても多くの英雄や預言者たちが輩出した事実を考えたとき、この民族のもとではひとりの誠実な男でさえ出会えるものであろうかと、いまもって疑念を抱く人がいるのだろうか？　劇場に対する当時のわたしの熱の入れようときたら大変なもので、頭に浮かぶすべてのものが喜劇に変じたほどであった。そこですぐさまわたしは妙案を思いつき、まったく推測だにされないところで、この民族のために美徳を証明してみせるとき、舞台の上ではどのような効果が発揮されるだろうかと、試してみようと思ったのであった。[15]

それゆえ、この作品を「蹂躙された民族の見事な名誉回復のドラマ」[16]と見ることも不可能ではないが、レッシングの主眼は、むしろキリスト教社会に巣食う偏見、偽善、不寛容といった悪徳を告発することにあった。そこにはキリスト教徒としてのレッシングの鋭い自己批判も含まれている。この作品の成立後ほどなくして、レッシングは作品のなかのユダヤ人を地で行くような人物に巡り遭う。一七二九年九月六日、デッサウで生を享けたモーゼス・メンデル

スゾーンである。レッシングは同い年のこのユダヤ人と、人種と信仰の相違を乗り越えた美しい友情を育み、二人の交流は三十星霜に及ぶことになる。レッシングは彼と知り合った少しあとに、ミヒャエーリス宛の手紙において、次のように報告している。

彼はほんとうにユダヤ人で、まだ二十いくつかの人間ですが、特に誰の指導も受けていないのに、いろいろな言語や、数学や、哲学や、詩文などをたいへん得意としております。彼の同信の人々はとかくこれまで彼のような人物に対して不幸な迫害心を抱いてきたようですが、彼らがやり方を改めて彼を成長させてくれるならば、彼は必ずや彼の国民の名誉ある存在となるだろうと、今からわたしは思っております。彼の誠実さと彼の哲学的精神は、今からわたしに彼を第二のスピノザ（ein zweiter Spinoza）と見なさしめるものであります。第一のスピノザと完全に対等となるのに、彼に欠けているものといえば、前者の間違いくらいのものでありましょう。[17]

果たせるかな、のちのメンデルスゾーンの偉業と名声は、レッシングの眼識の正しさを見事に実証してみせる。かつてマイモニデス（モーゼ・ベン・マイモン）について言われた「モーセからモーゼスまで、このモーゼスに比すべきものなし」（Von Moses bis Moses war keiner dem Moses gleich）という句が、いまやメンデルスゾーンに適用され、むしろこちらが主流になるほどの働きを、彼は実際に成し遂げてみせるのである。[18]

四

さて、レッシングは一七五一年末から約一年間、マギステルの学位を取得するために一時的にベルリンを離れ、弟

テオフィルス（Johannes Theophilus Lessing, 1732-1808）の学ぶヴィッテンベルクに赴いて、当地の大学で本格的な歴史研究に精力的に取り組んだ。その貴重な成果が、「カルダーヌス弁護」「ホラティウス弁護」「イネプトゥス・レリギオースス弁護」「コッホレーウス弁護」の四編からなる『弁護』*Rettungen* (1754) である。これらはいずれも、世間の偏見や悪意によって不当な扱いを受けてきた人物や書物を取り上げて、より公平な学問的立場から再評価し、それらの名誉回復（Ehrenrettung）を図ろうとしたものである。レッシングが早くもこの時期に、世評に逆らって異端ないし背教の思想を取り上げた事実は、ヴォルフェンビュッテル時代（一七七〇―八一）にH・S・ライマールスの遺稿を『無名氏の断片』として公にした意図を解明するよすがとなるであろう。

一七五二年十一月、再びベルリンに舞い戻ったレッシングは、ニコライ教会広場一〇番地（Nikolaikirchhof 10）の屋根裏部屋に居を構え、一七五五年十月までそこに住んだ。この家にメンデルスゾーンや出版書肆のフリードリヒ・ニコライなどが足繁く通って来て、ベルリン啓蒙主義を特徴づける各種の議論が展開された。ニコライ教会広場はニコライ地区（Nikolaiviertel）の一角にあるが、「赤の市庁舎」と呼ばれた分断時代の東ベルリンの市庁舎に隣接するこの界限は、まさにベルリン市の発祥の地であり、その中心に位置するニコライ教会（Nikolaikirche）はベルリン最古の教会である。「ベルリン」という名前が最初に文書に登場するのは一二四四年であり、パリやロンドンやウィーンは当時すでに大都市としての歩みを始めている。ともあれ、最古のベルリンの面影を今に伝えるのがこの一角である。だが、教会堂を含め周辺の建物の多くはベルリンの市制七五〇年を記念して、当時の東ドイツ政府が一九八七年に古き時代を再現して修復造成したもので、すべてがレッシングの時代そのままではない。とはいえ、ニコライ教会広場一〇番地のレッシングの家とニコライ教会とは、狭い石畳の路地を一つ隔てただけの文字通りの至近距離にある。屋

根裏のレッシングの部屋からはニコライ教会が目の前に見え、朝に夕に教会の鐘の音が聞こえたはずである。おそらく彼はそのたびに郷里のザンクト・マリア教会で牧会に精を出す父を思ったであろう。遠く離れていても牧師の父はつねに息子の心のなかにいたに違いない。

現在のニコライ教会の前庭には、歴史の女神の銅像がひっそりと佇んでいるが、レッシングのかつての寓居は、教会堂を挟んでこのクリオの像のほぼ正反対の位置にある。ちなみに、このクリオ像はレッシングの時代にはまだ存在しなかったもので、もともとは一八六〇―七一年に建造された大庭園のなかで、フリードリヒ・ヴィルヘルム三世の記念碑の台座を飾っていた。しかし第二次世界大戦によって庭園そのものが破壊されてしまったため、斜め向かいに設置されている「学問のアレゴリー」(Allegorie der Wissenschaft) の像とともに、現在の場所に移設されたという。二つの像の原作者はアルベルト・ヴォルフ (Albert Wolff, 1814-92) で、クリオの像の方は一八七六年に制作されたものである。もともとは左手で台座にもたれかかり、右手で文字を書いていたという。しかしもともとの付属物が失われた今、この像がクリオであることは示す唯一の手掛かりは、彼女がその上に膝をついている甲冑の胸当てのみである。いずれにせよ、トランペットも巻物も持っていないので、クリオという名前が添えられていなければ、一目でそれと判別できる人は多くはなかろう。

それはともあれ、レッシングと歴史の女神クリオと学問のアレゴリーとが、ニコライ教会を取り囲む形で存在していることは、レッシングの思想世界を象徴的に示しているようで興味深い。しかもそのニコライ教会の内部には、左手の壁にはドイツ敬虔主義の創始者のフィリップ・ヤーコプ・シュペーナー (Philipp Jakob Spener, 1635-1705) の肖像画が、その少し右寄りの列柱にはネオロギーの太祖ヨーハン・ヨアヒム・シュパルディング (Johann Joachim

Spalding, 1714-1804) の肖像画が掛かっている。知っている人は多くなかろうが、シュペーナーは一六九一年から一七〇五年まで、シュパルディンクは一七六四年から一七八八年まで、ニコライ教会の牧師を務めた。もちろん、レッシングがニコライ教会広場に居住していた時期に、この二人はニコライ教会にはいなかったので、この二人をレッシングと結びつけて解釈することには異論もあろう。しかし彼のキリスト教理解にとっては、ある見逃すことのできない重要性がそこに潜んでいる。

シュペーナーの名前は、一七五九年十二月六日付けの『最新の文学に関する書簡』*Briefe, die neueste Literatur betreffend* に、たった一度だけ登場する。[19] しかしレッシングは、まさに第一次ベルリン時代に、『ヘルンフート派についての所見』*Gedanken über die Herrnhuter* (1750) という断片を書いて、ツィンツェンドルフ的な敬虔主義について一定の理解と批判を示しているので、シュペーナーについても十分な認識を有していたはずである。シュパルディングについては、それによって「ドイツ啓蒙主義の基本理念」に文学的表現が与えられ、十八世紀の哲学的人間学の躍進を決定的に助長することになった書物、すなわち『人間の使命についての考察』*Betrachtung über die Bestimmung des Menschen* (1748) について、レッシングは一七五四年十一月十四日の『ベルリン特許新聞』において言及している。[20] それ以外にも、『反ゲッツェ論』第一〇篇のなかでも、エルネスティ、ゼムラー、テラー、イェルーザレムと並んで、彼の名前が挙げられている。[21]

五

レッシングは、終生牧師の父親を大いに尊敬していたが、ルター派正統主義そのものについては必ずしもそうではなかった。しかしネオロギーについては、彼はそれを露骨に軽蔑していた。彼によれば、「われわれのニュー・モードの聖職者」は、「神学者というにはあまりに欠けが多く、哲学者としてはとても十分といえない」[22]代物であった。

わたしが同胞の考えにどの程度満足しているかいないか、その理由について立ち入ることはやめるが、ただこれだけはお前に言っておかねばならぬ。お前はその点でたしかにわたしを全く誤解しており、正統主義に関するわたしの態度のすべてをひどく間違って理解しているのだ。ひとがこの世をより以上に啓蒙しようと努めるとき、わたしがそれを妨げるはずがあろうか。ひとりひとりが宗教について理性的に考えようとするのを、わたしが心から望まないはずがあろうか。わたし自身が、自分のぞんざいな仕事に際して、こういう偉大なもくろみを促進する以外の、何か別の目的をいだいているのなら、わたしは自分自身を嫌悪するだろう。だがしかし、わたしには自分でできると思うやり方でそれをやらせてくれ。そして、そのやり方ほど単純なものがあるだろうか。とっくの昔にもう使いものにならなくなっている汚水を保存しておくつもりなど毛頭ない。わたしはただ、きれいな水をどこから引いてくるかがわかるまではそれを捨ててしまいたくないのだ。前後の見境もなくそれを捨て、あとになって子どもまで水肥のなかで湯浴みさせるようなことは、全くわたしの望むところではない。ところでわれわれの新流行の神学が正統主義に対してもつ関係は、汚水に対する水肥の関係以外の何ものだろうか。

正統主義に関しては、ありがたいことに、ひとはそれをかなりうまく処理した。ひとはそれと哲学とのあいだ

に隔壁を設け、両者はそれぞれその両側で他方を妨害することなしに、おのが道を進むことができた。しかしいまひとは何をしているだろうか。ひとはこの隔壁をふたたび取り壊そうとし、そしてわれわれを理性的なキリスト教徒にするという口実のもとに、はなはだ非理性的な哲学者にする。親愛なる弟よ、どうかこの点だけはより正確に調べてみてくれ。そしてわれわれの新しい神学者たちが投げ捨てるものではなく、むしろ彼らがその代わりに据えようと欲しているものに注意を払ってくれ。われわれの古い宗教体系が間違いであるという点では、われわれは意見が一致している。しかしわたしは、それがへまな職人か半人前の哲学者のつぎはぎ細工であるなどと、お前といっしょに言うつもりはない。人間の英知がこれほどよく発揮され駆使されているようなものをわたしはこの世で知らない。へまな職人か半人前の哲学者のつぎはぎ細工なのは、目下ひとが古い宗教体系の代わりに、しかも古い宗教体系が専横しているよりも遥かに大きな影響を理性と哲学とに及ぼしつつ、据えようと欲している宗教体系のほうである。ところでお前はわたしがこの古い宗教体系を擁護することを悪く思っているのか。わたしの隣家は崩壊に瀕している。隣人がそれを取り払うつもりなら、わたしは精を出してそれを手伝おうと思う。しかし隣人はそれを取り払おうとはせず、わたしの家をすっかり廃屋にしてしまってまでも、自分の家の支柱や土台をかためようとする。そんなことはやめてもらうか、さもなくばわたしは倒れかかっている隣家を自分の家同様に引き受けるだろう（一七七四年二月二日付けの弟カール宛の手紙[23]）。

以上の引用から、正統主義とネオロギーに対するレッシングのスタンスはかなりよくわかる。レッシングは根本的には啓蒙主義の申し子であり、人々を啓蒙して、「ひとりひとりが宗教について理性的に考えることができる」（ein jeder über die Religion vernünftig denken möge）ようにすることを、自分の仕事の崇高な目的と見なしていた。彼

にとって正統主義は、「とっくの昔に使いものにならなくなっている汚水」(das unreine Wasser, welches längst nicht mehr zu brauchen) のようなものであり、早晩捨て去られるべき運命にあった。しかし、だからといってレッシングは「新流行の神学」(unsere neumodische Theologie) すなわちネオロギーには与しない。彼の考えによれば、それは人々を「理性的なキリスト教徒」(vernünftige Christen) にするという口実のもとに、実は「はなはだ非理性的な哲学者」(höchst unvernünftige Philosophen) をつくりだすだけであり、人類の啓蒙という偉大な目標を達成する上で正統主義よりも一層妨げとなるものである。したがって、正統主義が「汚水」であるとすれば、ネオロギーはそれよりもはるかに不潔な「水肥」(Mistjauche) に譬えられる。両者とも不潔ないし不純である――つまり非真理である――が、「汚水」(正統主義) のほうが「水肥」(ネオロギー) よりはまだしも耐え得るものである。レッシングがネオロギーに反対して正統主義の立場を擁護しようとするのはこのためである。しかし正統主義の擁護といっても、彼は「自分の家」(学術) を廃屋にされたくないがために、「倒れかかっている隣家」(正統主義) をただ「自分の家同様に引き受け」ているにすぎず、本音ではそれを取り壊すことに賛成なのである。[24] にもかかわらず彼が正統主義の肩をもつのは、単なる見せ掛けの擁護というよりは、より本質的には、彼自身にも「きれいな水」(reines Wasser) をどのように引いてくるかがまだわからないからである。言い換えるなら、レッシング自身も真理 (きれいな水) を現に所有しておらず、それを探求する身であった。レッシングが「真理探求者」(Wahrheitssucher) と言われる所以である。

六

次に、敬虔主義に対するレッシングの基本的態度は、『ヘルンフート派についての所見』という断片に暗に示されている。この断片におけるレッシングの根本命題は、「人間は行為のために創造されたのであって、屈理屈をこねるために創造されたのではない（Der Mensch ward zum Tun und nicht zum Vernünfteln erschaffen）。しかし屈理屈をこねるために創造されたのではないからこそ、まさにそれゆえに、人間は行為よりも屈理屈をこねることに没頭する」[25]、というものである。レッシングによれば、原始キリスト教の時代には、信者たちは厳格で有徳的な生活を送り、愛を実践しながら、真理のためには死をも辞さなかった。しかし社会に定着するにつれて、教会は「その宗教にきらびやかな装飾を施し、教理を一定の秩序へともたらし、そして神的真理を人間的証明で支える」[26]ことに専念しだした。かくして「実践のキリスト教」(das ausübende Christentum)に取って替わって、「観照のキリスト教」(das beschauende Christentum)が支配的になった。こうして成し遂げられた中世カトリシズムの偉大なスコラ主義的総合に対して、プロテスタントの宗教改革は、キリスト教を本来の姿に回復しようと欲したし、またそうすべきであったが、ルターとツヴィングリが聖餐式に関する些細な言葉上の問題をめぐって対立し、その目的を達成できなかった。宗教改革によって迷信が力を失い、真理がその輝きを増したことはたしかであるが、他方では宗教改革は「キリスト者の義務の履行」からいよいよ遠ざかり、プロテスタント正統主義の主知主義化が進んだ。「神学と哲学のかくも見事な合成」が再びなされ、哲学は「証明によって信仰を強要し」、神学は「信仰によって証明を支え」ようとするようになった。「われわれは認識においては天使であり、生活においては悪魔である」(Der Erkenntnis nach sind wir Engel, und dem Leben

nach Teufel)[27] というような倒錯した主知主義に対して、シュペーナーやツィンツェンドルフが主導した敬虔主義は、まさに「実践のキリスト教」を取り戻し、信仰の自発性の強調、敬虔なる信仰生活の尊重、形而上学的思弁に対する行為的実践の重視を強く打ち出したのである。

以上が、本稿の論旨に関係するかぎりでの、この断片の主旨であるが、以下に引用する『ベルリン特許新聞』（一七五一年三月三十日）の論評も、「実践のキリスト教」への共感を窺わせるものである。

大抵の神学者が不毛な論争に自己を見失ってしまう時代に、キリスト教の実践面について考える神学者がいまでも時々いることは、幸いなことである。大抵の神学者ときたら、辛辣さ、喧嘩好き、中傷、抑圧などから心を清めることによって、またキリスト者の唯一の本質的表徴をなすあの愛を広めることによって、一体化への基礎を据えるということは後回しにして、あるときは単純なヘルンフート派を断罪し、あるときはさらに単純な宗教の嘲笑者にいわゆる反駁をもって報い、その結果嘲笑に新たな材料を提供したり、またあるときは一体化できない事柄について喧嘩をしたりしている。人々が心を一つにして自らの義務を履行するように意を用いる前に、継ぎはぎ細工でただ一つの宗教を作ろうとすることは、虚しい思いつきである。一つ小屋に閉じ込めれば、二頭の悪犬が善良になるとでもいうのだろうか。見解の一致ではなく有徳的行為における一致こそが、世界を平穏にし幸福にするのである。[28]

ここで取り上げた断片と論評から、敬虔主義そのものに対するレッシングの積極的見解を導き出すことには無理があるとしても、批評家レッシングが牧師館で培われたキリスト教的敬虔に深く棹さしていることは、少なくともそこから確認できる。

むすび

以上の考察から、レッシングがその内面において終始キリスト教と真剣に関わってきたことが明らかになったと思う。レッシングはドイツ啓蒙主義を代表する思想家の一人であるが、彼のめざす啓蒙主義の理想は、フランス啓蒙主義の代表者ヴォルテールのそれとは本質的に大きく異なっている。批評家および劇作家としてのレッシングの背後に、あるいはその根底に、キリスト教思想家としてのレッシングが潜んでいるからである。[29] それゆえ、文学者としてのレッシングは、彼のキリスト教理解を抜きにしては正しく捉えることができない。その点がまた、レッシングをゲーテやシラーから区別する最重要ポイントでもある。

レッシングはその出自からして、生涯キリスト教と真剣に向き合う運命に定められていた。ドイツ精神史上、牧師館に生まれた偉大な文学者や哲学者は少なくないが、レッシングはまさにその最初の偉大な思想家であった。彼はキリスト教の伝統をただ従順に墨守するのではなく、むしろ「賢明に疑う」という仕方で、「生涯にわたって生家の精神的遺産を守った」。[30] 彼は表面的には牧師館とは無縁な、あるいはむしろそれと対立するような歩みをしながらも、心のうちではつねに尊敬する牧師の父親と対話し、近代という新しい時代に即応したキリスト教信仰のあり方を模索していた。レッシングは伝統的なキリスト教とは明らかに一線を画しながらも、「ある偉大な、慈悲深い君主のいとしい庶子」(Lieber Bastard eines großen, gnädigen Herrn)[31] の自覚をもっていた。彼はキリスト教の源泉にまで立ち返って、そこから新しい水を汲み出そうと努力したのである。[32] 最晩年の『賢者ナータン』と『人類の教育』は、かかる光のもとで読まれないかぎり、正しく理解されないであろう。

文献目録

B *Werke und Briefe in zwölf Bänden.* Herausgegeben von Wilfried Barner zusammen mit Klaus Bohnen, Gunter E. Grimm, Helmuth Kiesel, Arno Schilson, Jürgen Stenzel und Conrad Wiedemann. Frankfurt am Main: Deutscher Klassiker Verlag, 1985ff.

G *Werke.* In Zusammenarbeit mit Karl Eibl, Helmut Göbel, Karl S. Guthke, Gerd Hillen, Albert von Schirnding und Jörg Schönert. Herausgegeben von Herbert G. Göpfert. 8 Bde. München: Carl Hanser Verlag, 1970–1979.

LM *Sämtliche Schriften.* Herausgegeben von Karl Lachmann, dritte, auf's neue durchgesehene und vermehrte Aufl., besorgt durch Franz Muncker. 23 Bde. Stuttgart (Bd. 12ff.), Leipzig (Bd. 22f.), Berlin und Leipzig, 1886–1924. Nachdruck, Berlin: Walter de Gruyter & Co., 1968.

註

(1) 森鷗外「レッシングが事を記す」『鷗外全集』第二二巻、岩波書店、一九八八年、三七一一三八六頁。

(2) Th. W. Danzel, *Gotthold Ephraim Lessing, sein Leben und seine Werke*, 2 Bde., Leipzig: Dyk, 1849; Helen Zimmern, *Lessings Leben und Werke*, 2 Bde., Celle & Leipzig: Literarische Anstalt, 1880.

(3) Shinichi Minamiozi, „Lessing in Japan," *Erbepflege in Kamenz*. Schriftenreihe des Lessing-Museums 11. Jahresheft, herausgegeben von Dieter Fratzke und Wolfgang Albrecht (Kamenz: Lessing-Museum Kamenz, 1991), 81–89; hier 88.

(4) Karl Gotthelf Lessing, *Gotthold Ephraim Lessings Leben*, Teil I (Hildesheim, Zürich, & New York: Georg Olms Verlag, 1998), 27; cf. T. W. Rolleston, *Life of Gotthold Ephraim Lessing* (London: Walter Scott, 1889), 17.

(5) Richard Daunicht, *Lessing im Gespräch. Berichte und Urteile von Freunden und Zeitgenossen* (München: Wilhelm Fink Verlag, 1971), 14.

(6) Daunicht, *Lessing im Gespräch*, 18.

(7) Wilhelm Dilthey, *Das Erlebnis und die Dichtung: Lessing-Goethe-Novalis-Hölderlin*, 16. Aufl. (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1985), 64.

(8) LM 17, 7–8 (An Justina Salome Lessing vom 20. Jan. 1749); B 11/ 1, 15–16 (Brief Nr. 11).

(9) この家は取り壊されてもはや存在しないが、その家の外観と内装は写真と絵画で見ることができる。Cf. Vera Forester, *Lessing und Moses Mendelssohn: Geschichte einer*

Freundschaft (Darmstadt: Lambert Schneider Verlag, 2010), 表紙、57, 111.

(10) LM 17, 16 (An Johann Gottfried Lessing vom 28. April 1749); B 11/ 1, 24 (Brief Nr. 18); cf. B 11/ 1, 13 (Brief Nr. 7).

(11) LM 17, 17-18 (An Johann Gottfried Lessing vom 30. Mai 1749); B 11/ 1, 26 (Brief Nr. 21) (傍点筆者).

(12) Ernst Cassirer, "Die Idee der Religion bei Lessing und Mendelssohn," in *Lessings 〉Nathan der Weise〈* (Wege der Forschung. Bd. 587), herausgegeben von Klaus Bohnen (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1984), 108.

(13) 平田達治『ベルリン・歴史の旅——都市空間に刻まれた変容の歴史——』大阪大学出版会、二〇一〇年、一八三—一八五頁参照。

(14) Cf. Alexander Altmann, *Moses Mendelssohn: A Biographical Study* (London: Routledge & Kegan Paul, 1973), 36.

(15) LM 5, 270; G 2, 645 (Vorrede zum 3. Teil seiner *Schriften*, Berlin, 1754).

(16) Christian Heinrich Schmidt, *Chronologie des deutschen Theaters*, 1775, 141-142; quoted in Julius W. Braun, *Lessing im Urtheile seiner Zeitgenossen*, Bd. 1 (Hildesheim: Georg Olms Verlagsbuchhandlung, 1969), 5; Daunicht, *Lessing im Gespräch*, 39.

(17) LM 17, 40 (An Johann David Michaelis vom 16. Okt. 1754); B 11/ 1, 58 (Brief Nr. 62).

(18) この句については、Altmann, *Moses Mendelssohn*, 197, 758, 875 n81.

(19) LM 8, 194; G 3, 235.

(20) LM 5, 447; G 3, 229.

(21) LM 13, 206; G 8, 302.

(22) LM 18, 83 (An Karl Lessing vom 8. Apr. 1773); B 11/ 2, 540 (Brief Nr. 906).

(23) LM 18, 101-102 (An Karl Lessing vom 2. Feb. 1774); B 11/ 2, 614-615 (Brief Nr. 957). ニコライ教会広場のレッシングの家の位置とその造りを考慮に入れると、「隣家」というこの表現にはある特別の意味が感じられる。

(24) 一七七七年三月二十日付けの弟カール宛の手紙では、レッシングは正統主義神学を「自分の公然の敵」(meinen offenbaren Feinden) と呼びながら次のように述べている。「わたしが新しい（根本的に非寛容的な）神学よりも古い正統主義の（根本的に寛容な）神学を好むのは、後者は健全な人間理性と矛盾しており、前者は好んでそれを買収したがる、というだけの理由からである。わたしは自分のひそかな敵をよりよく警戒することができるために、自分の公

然の敵と仲良くやっているのである」。LM 18, 226-227 (An Karl Lessing vom 20. März 1777); B 12, 51-52 (Brief Nr. 1257).

(25) LM 14, 155; G 3, 683 (Gedanken über die Herrnhuter).

(26) LM 14, 158; G 3, 687 (Gedanken über die Herrnhuter).

(27) LM 14, 160; G 3, 688 (Gedanken über die Herrnhuter).

(28) LM 4, 303-304; G 3, 54-55 (*Berlinische privilegierte Zeitung*. 38. Stück, 30. März 1751).

(29) 弟のカールもこの点に注意を促している。See Karl Gotthelf Lessing, *Gotthold Ephraim Lessings Leben*, 26-27.

(30) Karl S. Guthke, *Gotthold Ephraim Lessing*, 3. erweiterte und überarbeitete Aufl. (Stuttgart: J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung, 1979), 19.

(31) LM 18, 356 (An Elise Reimarus vom 28. Nov. 1780); B 12, 360-361 (Brief Nr. 1602).

(32) レッシングが『霊と力の証明について』の続編として出した『ヨハネのテスタメント』の冒頭に、ヒエロニムスの「彼ハ主ノ胸ニ寄リカカリ、主ノ教エノ小川ヲ最モ純粋ナ源泉カラ汲ミ出シタ」(qui in pectus Domini recubuit et de purissimo fonte hausit rivulum doctrinarum) という言葉を引いているのは、ここからよく理解できる。